



## 特選 八期通信アーカイブス

### これからが本当の人生 森山 アツ子(6組 旧姓、大重)

日本経済新聞の夕刊に「瀬戸内寂聴さんに聞く」＝(西行出家の迷)という記事があった。寂聴さんが、51歳で出家した西行さんの行き方を重ね合わせ「定年から本当の人生が始まる」「守りに入った瞬間から年を取る」という内容だった。



「定年から本当の人生が始まる」と言われて、これまでを振り返ってみると、子育て、母の面倒、家計のやり繰りと、いろいろしながらみに縛られて本当にしたいことを我慢してきたような気がする。でも、その時々に必要なことを懸命にやって来た思いもある。

寂聴さんに「定年後は、西行さんや私のようにわがまま生きたらどうですか」と問いかげられると、さて、どうわがままに生きようかと考えてしまう。寿命は、生まれた時に決っている。あと何年、生かされるかわからないが、あるがままに生きてゆきたい。

「守りに入った瞬間から年をとる」と寂聴さんは云っている。もっと積極的に生きよう。その為にはまず、健康が何より大切だ。健康でなければ何も出来ないし、やる気も起らない。

ここ4、5年、主人とウォーキング、その後、体操をするという事を実行してきた。それ以来、体調はすごくいい。何事にもいやがらずに取り組もうという気になってきている。

高校に入学し、初めて目にした古文が吉田兼好の徒然草であり、とても懐かしく思い出された。序段の「つれづれなるままに日暮らし、すずりに向かって心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」(訳：しなければならぬことも特に時間の経つのも忘れ、硯に向かかって心に浮かんで消えていく、取るに足らないことになんともなく書きつけてみたところ、妙におかしな気持ちになるものである)。

### つれづれなるままに

日高 智(5組)



吉田兼好は、本名を卜部兼好(ウラベカネヨシ)と言い、神官の三男として誕生。三十代に出家したため、音読みでケンコウとしたとある。吉田の姓は、卜部家が京都吉田にあったこと、室町時代に卜部家が吉田神社の祠官を務めるようになり、吉田姓を名乗るようになった。徒然草は四十八歳と四十九歳の時の作品であり、序段と二百四十三段にかけて成るもので、枕草子、方丈記に並ぶ随筆体の元祖だといふことだ。

### 近況報告

欽島 繪美子(5組)

卒業してから50年も経つなんて。信じられないぐらいの早さで過ぎ去った年月を思っています。引き揚げて来て、1年生に入学以後、転校が続いて自分の根っこがどこにあるのか心もとない気持ちで過してきました。学区制の高校では、小学校から一緒の方も多く、〇〇ちゃんと呼び合ったり、先生の話しで盛り上がりたりする光景は、私にとってちょっとうらやましく映ったものです。

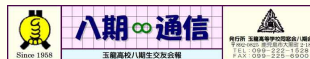


在校当時、東京から来られた石井先生の古典の授業で「太平記」の一部分を暗記させられた記憶があります。今では、最初の二行ぐらいしか覚えていないのですが。

現在、大げさに言えば、歴史的かな使いや文語文法を使って作るある短歌グループに所属しており、才能も顧みず、駄作を作り続けています。この世界は、比較的年齢の高い方が多く、50代でも若いといわれてしまう世界。その錯覚も今まで続けている理由の一つなのかもしれません。

短歌は癒しであり、応援歌でもあり、心を文学に表すことで発見があり、ある人にとって救いでもあり……。しかしその実、毎月の投稿日切日の前日は、大変非生産的な時間を未だに費やして、周りにあきらめられています。

専門用語まで飛びかう今、ゆっくりした風変わりな世界にいるのも悪くない気がして、当分続けたいと思っています。



練習に出かける私をそしらぬ顔で見送る夫も「ほらお母さん、愛ちゃんが出てくるよ」と、台所にいる私に声を掛けてくれる時はちよっぴりうれしい。オレンジのボールを追いかけていると何もかも忘れ、私の最良のストローク解消法であるが、ただ一つどうにもならないのは、悲しいかな、この年齢になると疲れが二、三日回復しない事である。

はじめての試合に出た時、緊張のあまり、のどはガラガラ、上くちびるがあがったままおりに来なかった事を記憶している。練習に出かける私をそしらぬ顔で見送る夫も「ほらお母さん、愛ちゃんが出てくるよ」と、台所にいる私に声を掛けてくれる時はちよっぴりうれしい。オレンジのボールを追いかけていると何もかも忘れ、私の最良のストローク解消法であるが、ただ一つどうにもならないのは、悲しいかな、この年齢になると疲れが二、三日回復しない事である。

### 愛ちゃんまではいきませんが

紀 祥子(6組 旧姓、岩元)

やる目的で始めた卓球もかれこれ十五年になる。年月は長いが腕は全くあがらず、ただ楽しく週二回ほど近くの公民館で遊んでいる。「卓球、愛ちゃん」のおかげで近頃は、ねくらのイメージの競技も脚光を浴びて放映もされて、世間も少し注目してくれるようになったのでうれしい。年に数回は、市の婦人卓球試合にも挑戦している。三段腹に短パンをはき、大根足をむき出して頑張っている。(ご想像下さい)緊張感を味わうのもたまにはいいものです。

### 第2のふるさと、指宿 廣演 リユ子(7組)

昭和48年に主人が指宿の池田小に赴任し、学校の前に住んでおりましたが、雨漏りで住めなくなり借家もなく、現在の所に土地を購入して家を建てました。そこに五年間住んでおりましたが、転勤のため、退職まで貸家にておりました。

退職後、永住の地を決めるに当たって、あちらこちらと見て廻りましたが、指宿は温泉も1日中に入れるし、気候も良いしと建替えをして住み着いて、早や14年目に入りました。

みかんの時期になると、出水郡の東町を転出する記念に頂いた思い出の木「セミノール」が毎年、実をつけてくれます。果汁たっぷりのおいしいおみかんです。5月になると杜仲の木が葉を繁らせてくれます。温暖な気候のせいか、シンビジウム等、露地でも花が咲きます。交換し合って種類も増えてきました。

肝属郡の佐多町にいる時、50cm位の苗木を戴いたのを大切に育て、指宿に植えていたもので、現在は大きく成り過ぎてハシゴで収穫し、自己流でお茶葉にして主人の兄弟、知人に配り、喜ばれております。



### 見果てたい夢 山と街道と私

古市 庄八郎(5組)

長年、時間貧乏を託って、やりたい趣味も封印し、早く「金持ち」より「時間持ち」になりたいと念じてきて四十余年。定年とともにスッパリ現役の足を洗い、未知の世界へ。まず手掛けたのがスキューバダイビング。用具一式を揃え、伊豆や沖繩の海底を楽しみ、いずれ海外へもと意気込んでいた。しかし、ある時考えた。体力のある時期にしかできないことがあるのでは。丁度その頃、深田久弥という登山家が定めた「百名山」の記事に接し、若い時分に登った富士山や宮之浦岳も含まれていることを知る。爾来、宗旨替えして深田教にはまり、北から南まで登った山々七十余座。何とか今年には十二、三座登り、全山達成できればと考えている。



この間、見知らぬ土地の風物や珍しい食と人々の出会いも大好きな、自称工コ派人間としては、街道のテクテク歩きも興味かききないところ。日本の三大街道(中山道、東海道、甲州街道)の未踏破は、東海道(五百四km)を残すのみだが、街道は南の薩摩街道から北の松前街道まで縦横無数に走っており、足腰の続く限りゆっくり歩きたい。